

二講

②念仏の救い—何故念仏が救いになるのか—衆生の志願を満てる念仏

- A. 曇鸞の問い
- B. 称名と聞名
- C. 称の意味 はかり、つりあう
- D. 称＝たたえる
- E. 称＝かなう
- F. 発願廻向

A. 曇鸞の問い

「如彼名義欲如実修行相応」とは、かの無碍光如来の名号よく衆生の一切の無明を破す、よく衆生の一切の志願を満てたまう。しかるに称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかんとならば、実のごとく修行せざると、名義と相応せざるに由るがゆえなり。いかんが不如実修行と名義不相応とする。(213)

しかればみ名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたもう」(161)

曇鸞二つの理由

「実のごとく修行せざる」「不如実修行」
「名義と相応せざる」「名義不相応」

不如実修行 教えられた通りに受け取らない＝三不信→信心の問題

名義不相応 念仏の謂われを知らない→本願の名号と知らない→行の問題

聖徳太子の十七条憲法の十条

「共に是れ凡夫ならくのみ」(965)

曇鸞「三不信」

淳心・一心・相續心の無い姿＝三不信
「決定の信を得ない」

攝取不捨の攝取 親鸞和讃左訓

「にぐるものをおわえとるなり」。

ひとたびとりて、永く捨てぬなり。撰はものの逃ぐるを追わえ取るなり。撰は撰めめ取る、取は迎え取る。

曾我先生

「無限後退の無限包摂」

曇鸞

これと相違せるを「如実修行相応」と名づく。このゆえに論主建めに「我一心」と言えり、と。(214)

名義不相応

いかんが不如実修行と名義不相応とする。いわく如来はこれ実相の身なり、これ物の為の身なりと知らざるなり。(214)

※ どちらに重きをおく言葉か ○→知る×知らない

①実相身○為物身×

「こういう為物身を知らない実相身というのは、結局、人間の方が願を掛けるほかないわけです。」(平野修選集二巻282頁)

②実相身×為物身○

「また反対に為物身を知って実相身を知らないということになりますと、神秘的になり、あるいは体験主義になるよりほかありません。」(同)

③実相身×為物身×

「今日の仏教、もっと言いますと宗教は、為物身を知らない実相身であるとか、実相身を知らない為物身というように、二つに引き裂かれているわけです。(中略)独立しながら随順する。そういう意味を開いてくるのは実相身であると同時に為物身であるという意味の中にあるかと思えます。」(同)

B. 称名と聞名について

一念多念文意

「称」は、御なをとなうるとなり。また、称は、はかりというところなり。はかりといは、もののほどをさだむることなり。名号を称すること、とこえ、ひとこえ、きくひと、うたがうところ、一念もなければ、実報土へうまるともうすところなり。(545)

親鸞の読み替え

大経の三誓偈の文

「名声超十方」(名声、十方に超えん)と

正信偈

「名声聞十方」(名声十方に聞こえん)

大経下巻冒頭の本願成就文

仏、阿難に告げたまわく、「それ衆生ありてかの国に生ずれば、みなことごとく正定の聚に住す。所以は何ん。かの仏国の中には、もろもろの邪聚および不定聚なければなり。十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德の不可思議なることを讃歎したまう。あらゆる衆生、その名号を聞いて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。」

図式化

証（11 願成就）→行（17 願成就）→信（18 願成就）

C. 称の意味「はかり」「たたえる」「かなう」

一念多念文意

また、称は、はかりというところなり。はかりというは、もののほどをさだむることなり。（545）

平野先生「つりあう」

「仏様あなたは光明無量の方です。何故なら気づきもしなかったこの(障り多き)自分のことが照らされました」

「仏様あなたは寿命無量の方です、いつ誰がどこに生まれようとも、生きようと、いつでもお会いできる永い寿命をお持ちであります。(略)なぜならこのような時代に生まれた私もあなたにお会いすることができました」

安田先生、

「人間には釣り合うことがない、だから諸仏が称名する」

浄土和讃

十方恒沙の諸仏は
極難信ののりをとき
五濁悪世のためにとて
証誠護念せしめたり（486）

D. 称=たたえる

「称仏六字」というのは、南無阿弥陀仏の六字をとなうるとなり。「即嘆仏」というのは、すなわち南無阿弥陀仏をとなうるは、仏をほめたてまつるになるとなり。また「即懺悔」というのは、南無阿弥陀仏をとなうるはすなわち無始よりこのかたの罪業を懺悔するになるともうすなり。「即発願回向」というのは、南無阿弥陀仏をとなうるはすなわち安樂浄土に往生せんとおもうになるなり。また一切衆生にこの功德をあたうるになるとなり。

(520)

曾我先生

「如来はわれらを罪人と呼びたまわず」—(選集第4卷)—

E. 称=かなう

称は「かなう」「召しにかなう」

善導の六字釈親鸞

「言南無者」というは、すなわち帰命ともうすみことばなり。帰命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがいて、めしにかなうともうすことばなり。このゆえに「即是帰命」とのたまえり。「亦是発願回向之義」というは、二尊のめしにしたがうて安楽浄土にうまれんとねがうところなりとのたまえるなり。「言阿弥陀仏者」ともうすは、「即是其行」となり。即是其行は、これすなわち法蔵菩薩の選択本願なりとしるべしとなり。安養浄土の正定の業因なりとのたまえるところなり。(521)

平野先生「勅命」

「勅命」とは、有無をいわさぬ命令のことですが、別にそういう命令が如来より下るという意味ではなく、自分自身が迷いの業の身だという目覚めは、まったく否定することのできない、いってみれば、有無をいわせないほどに真実なものであって、あたかも勅命を受けたようなものだ、という意味です。

親鸞の六字釈

しかれば、「南無」の言は帰命なり。「帰」の言は、至なり。また帰説〔よりたのむなり〕なり、説の字、悦の音、また帰説〔よりかかるなり〕なり、説の字は、税の音、悦税二つの音は告ぐるなり、述なり、人の意を宣述るなり。「命」の言は、業なり、招引なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召なり。ここをもって、「帰命」は本願招喚の勅命なり。

F. 発願廻向

善導の六字釈「発願回向」

「南無」と言うは、すなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」と言うは、すなわちこれ、その行なり。この義をもつてのゆえに、必ず往生を得、と。
(176)

親鸞の六字釈「発願廻向」

「発願回向」と言うは、如来すでに発願して、衆生の行を回施したまうの心なり。(177)

平野先生「発願」

仏に帰命するということは、実は「発願」という、菩提心を発すということであると明らかにされたわけです。「願作仏心」と「度衆生心」のことです。菩提心など発りようのない者に菩提心が発ったことが助かったということだ、と。それが親鸞の理解です。

平野先生「自因自果」

「真宗は自因自果であって、他因自果でない」

自因自果の根拠

しかれば、もしは行・もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまうところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと。知るべし。(223)

自因自果と発願廻向

我々にどこまでも、自因自果が成立することについては阿弥陀の本願が必要不可欠だという意味で他力なのです。(『親鸞の出遇った世界浄土真宗Ⅲ』46)

高僧和讃曇鸞章

無碍光如来の名号と
かの光明智相とは
無明長夜の闇を破し
衆生の志願をみてたまう (493)

安田先生

「願生は得生を求めたがるが願生が願生に満足するのを得生という」(『帰依三宝』)

一念多念文意に本願成就文を解釈

「歡喜」というは、「歡」は、みをよろこばしむるなり。「喜」は、こころによろこばしむるなり。うべきことをえてんずと、かねてさきよりよろこぶこころなり。(535)

浄土和讃

たとい大千世界に
みてらん火をもすぎゆきて
仏の御名をきくひとは
ながく不退にかなうなり (481)